

坂口安吾晩年の歴史観と現代への問題意識

——「夜長姫と耳男」を手がかりとして——

岩波隆浩

はじめに

坂口安吾は昭和二十五年十月に長編「街はふるさと」の執筆を終えてから一年半余りの間、小説から遠ざかっていた時期が存在する¹⁾。だが、昭和二十七年六月、雑誌『新潮』に「夜長姫と耳男」を発表して以降、安吾は再び旺盛な執筆活動に入り、昭和三十年二月に死去するまでの三年の間に多くの作品を残している。

この時期の安吾の作品の特徴として、歴史小説の多さが挙げられる。安吾は戦時中に島原の乱に関心を持ち、そこから「イノチガケ」を執筆して以降、「二流の人」、「織田信長」など歴史小説を定期的に発表していた。それが「夜長姫と耳男」発表以降、「信長」や「真書 太閤記」といった新聞連載、「梟雄」、「狂人遺書」などの短編の発表など歴史小説の数が増えている。「夜長姫と耳男」自体も、主人公に飛驒の匠という職人である耳男を据え、古代の飛驒を舞台に作品が展開していく。この時期の安吾には、日本の歴史に対する関心の深まりが見られるのである。

また、この頃の安吾は、日本の伝承や日本各地の歴史についても関心を寄せ、「安吾の新日本地理」、「安吾新日本風土記」等、日本各地を巡りルポエッセイを発表している。その中で、日本の古代史や日本の土地に残る風習について、安吾独自の考察が行われている。同時に土地の風習や歴史への考察と関連させ、安吾は現代の世相に対する言及も行っている。安吾の歴史への関心は、現代の世相への考えや意識と密接に関わっていると考えられる。

このような晩年の安吾の執筆活動の中に見られる歴史への関心と、現代の世相への問題意識は、晩年の安吾の執筆活動の再出発作品となった「夜長姫と耳男」にも表れていると考えられる。そこで本論では、「夜長姫と耳男」を手掛かりに、晩年の安吾の歴史への関心や現代の世相への問題意識がどのようなものであったかを考察していく。

一、「飛驒の匠」から離れていく耳男

安吾が「夜長姫と耳男」を執筆した背景には、その頃実際に安吾

が飛驒を訪れ、飛驒の匠と呼ばれる人々の作品を鑑賞し、その仕事に深く感銘を覚えたからだと考えられている。神田重幸氏は、安吾が「夜長姫と耳男」を執筆した動機を、飛驒に存在した「タクミの話や風物に対する強い愛着と神秘的なものへの関心を深めていったこと」にあると述べている。

昭和二十六年ごろから安吾は日本古代への新たな史的興味を抱き、『安吾新日本地理』の「飛驒・高山の抹殺」や「飛驒の顔」などを書くため取材旅行し、この地方におけるタクミの話や風物に対する強い愛着と神秘的なものへの関心を深めていったことが創作動機となった。

だが、「夜長姫と耳男」という作品は、夜長姫の笑顔に惹かれていく耳男の、夜長姫に対する反発と依存、最終的に夜長姫を刺殺することで達成される依存の否定という、耳男と夜長姫の関係を軸に展開している。それどころか作中では、耳男が飛驒の匠という存在から遠ざかっていくかのような描かれ方をしているのである。

耳男が夜長姫と初めて対面したときに、親方から教わった、「珍しい人や物に出会ったときは目を放すな」という飛驒の匠の心得が語られる。しかし耳男が匠の心得で夜長姫を見つめるのは最初の対面の一度きりであり、これ以降耳男は自分自身の感情を露わにして見つめるようになってしまう。

たぶん侍女もいるのだろうが、オレは目を開けて確かめるのを

控えた。一時も早く汗の雨ダレを食いとめるには、見たいものも見てはならぬ。オレはもう一度ジツクリとヒメの顔が見たかったのだ。(中略)

オレは茫然とヒメの顔を見つめた。冴えた無邪気な笑顔。ツブラな澄みきった目を。そしてオレは放心した。(中略)オレの目はヒメを見つめたままどうすることもできなかったし、オレの心は目にこもる放心が全部であった。(傍線は筆者が引いた。以下同じ)

耳男は、夜長姫の笑顔を匠として見つめるのではなく、その笑顔の前で放心することしかできない。そして作品の展開からも、夜長姫の顔をもう一度見たいという欲求そのものが、夜長姫の笑顔に惹かれていた耳男個人の欲求であると考えられる。

一方、耳男は夜長姫に対する恐怖心によって、夜長姫を見つめることもできなくなってしまふ。耳男は、夜長の長者から夜長姫の持仏制作を依頼されていたのだが、夜長姫から、自身の顔が馬の顔に似ているという指摘を受けたことで、夜長姫の気に入らない、怖ろしい化け物の像を制作する。だが、完成した化け物の像を気に入ったという夜長姫を、耳男はこの世で最も怖ろしい存在であると考ええるようになるのである。その結果、珍しい存在から「目を放すな」という親方の言葉すら、耳男は実践することができなくなってしまふのである。

オレにとつては、ヒメがオレを殺すことはもはや疑う余地がな

かった。それも、今日、風呂からあがって奥の間へみちびかれ
て匆々にヒメはオレを殺すであろう。(中略)

長者がヒメをしがえて現れた。オレは挨拶もどかしく、ヒ
タイを下にすりつけて、必死に叫んだ。オレは顔をあげる力が
なかったのだ。

耳男は夜長姫を見つめるといふ行為の中で、匠の心得ではなく自
分自身の感情を優先させ、感情に左右されるようになっていくので
ある。

また、作中で耳男が制作する、化け物の像と弥勒像の評価も、耳
男の制作時の心境と真逆の評価を夜長姫によってされている。

化け物の像制作時の耳男は、夜長姫に反発しようと思いつながら
も、夜長姫の笑顔に惹かれているために、化け物を彫ろうとする度
に、夜長姫の笑顔を思い出していた。このときの耳男は、「オレは
ヒメの笑顔を押り返すほど力のこもったモノノケの姿を造りだす自
信がなかったのだ。オレの力だけでは足りないことをさとつてい
た」と自信の無いことを認めながらも、怖ろしい像を作り上げよう
としていた。そのために耳男は、蛇を切り裂き、生き血を飲み、天
井に吊るしながら、夜長姫を呪うことで、自分自身を奮い立たせて
いたのである。それでも耳男は、「ヒメの笑顔に押されたときには、
オレの造りかけのバケモノが腑抜けのように見えた。ノミの跡の全
てがムダにしか見えなかった」と感じ、自分の腕と作品に決して満
足をすることがなかったのである。

一方、弥勒像制作時の耳男は、蛇を吊るして夜長姫を呪うことを

しなくなっていた。耳男は夜長姫の笑顔を弥勒像に表すためには、
夜長姫の笑顔を押り返さずに、その笑顔が押し返ってくる力をそのまま
弥勒像の顔に表せばよいと考えていた。この状態の自分を、耳男は
「心に安らぎを得て、素直に芸と戦って」といると考え、化け物を
造っていた頃よりも「すべてに於いて立ちまざっている」と満足し
ていたのである。

しかし、結末において夜長姫が語る仏像の評価では、耳男が自身
の仕事に満足していた弥勒像は駄目な作品であり、不安に駆られな
がら決して満足できない中で完成させた化け物の像こそ「素晴らし
い」作品であるという。これは、安吾が考えていた飛驒の匠の作品
が素晴らしい理由と真逆のものとなっている。昭和二十六年九月の
『別冊文藝春秋』に発表したエッセイ「飛驒の顔」の中で、飛驒の
匠は自身の名を残すことを目的としておらず、ただ「その出来栄え
に自ら満足すること」^③を目的とした「澄み切った心境」で仕事をす
るからこそ名作が生まれるのだと安吾は述べていたのである。

さらに、夜長姫は、化け物の像が素晴らしいのは、耳男が自身の
「好きなもの」、つまり夜長姫を呪っていたからだということを指摘
し、飛驒の匠として、仕事の「出来栄えに自ら満足すること」を目
的とせず、天井に蛇を吊るすという耳男独自の行為を行い、好きな
ものを「呪うか殺すか争うか」しながら仕事を続けることを耳男に
望んでいるのである。

以上のように、「夜長姫と耳男」の作中には、飛驒の匠がどのよ
うな存在なのか、飛驒の匠の仕事はどのようなものなのかというこ
とではなく、耳男と夜長姫の対立の中で、蛇を吊るすという耳男独

自の仕事が形作られていく様子が描かれていた。耳男は飛驒の匠という無名の集団の中の存在としてではなく、夜長姫に惹かれながらも反発し、対立する一人の個人として描かれているのである。

二、自我の問題

耳男が集団の一部としてではなく、一人の個人として描かれているということは、「夜長姫と耳男」という作品の語り手が、主人公である耳男本人であるということによっても強調されている。安吾は、「夜長姫と耳男」発表以前から、「紫大納言」や「桜の森の満開の下」のような、歴史の中に材をとった説話文学のような作品を書いているが、これらの作品では主人公とは異なる語り手が設定され、その語り手によって過去の出来事が語られるという形式であった。本文映子氏は、作品が耳男の語りによって展開しているのは、「(個)の主張」を耳男が行っているためであり、「夜長姫と耳男」には、自己を発見した耳男によって語られる、自分自身が自己を発見するまでの過程が描かれていると指摘する。

ところが、『夜長姫と耳男』は、耳男が自分自身を呼ぶ、文字通り「オレ」という語で始まるのである。「ヒタ随一の名人」は「オレの親方」として紹介され、「夜長の長者」はその親方を招くよくわからない何者かではない。この転倒した冒頭で、もうこの小説が「昔話」に対して持つ距離は明らかだ。それは、〈物語〉に対する〈個〉の主張、とでも呼べるかもしれない。

ない。事実、以後、耳男は「昔話」的な枠組みを出ることによって、タクミとして、人間として、男としての自己を発見していくのだから。⁴⁾

そして、その自己の発見という言葉は、安吾の「墮落論」(昭和二十一年四月)の末尾の一文「墮ちる道を堕ちきることによつて、自分自身を発見し、救はなければならない」と結びつく。

人間は可憐であり脆弱であり、それ故愚かなものであるが、堕ちぬくためには弱すぎる。人間は結局処女を刺殺せずにはゐられず、武士道をあみださずにはゐられず、天皇を担ぎださずにはゐられなくなるであらう。だが他人の処女でなしに自分自身の処女を刺殺し、自分自身の武士道、自分自身の天皇をあみだすためには、人は正しく墮ちる道を堕ちきることが必要なのだ。(中略) 墮ちる道を堕ちきることによつて、自分自身を発見し、救はなければならない。⁵⁾

安吾は「墮落論」の中で、古代から貫かれる「天皇制」というシステムが、偉大なものに額づくことよつて自身の脆弱さを補強しようとする人間の心理を利用したものであることを指摘した。そして、敗戦後である現代を生きるには「他人の処女でなしに自分自身の処女を刺殺し、自分自身の武士道、自分自身の天皇をあみだす」必要がある、そのために人間は旧体制の中で形作られた理想的・模範的人間像から墮落しなくてはならないと説く。そして、墮落の果

てに人間は、「自分自身を発見する」のである。

この「自分自身を発見する」ということに、安吾はこだわりを見せている。戦後、「墮落論」発表以前の昭和二十年十二月に執筆していたとされる「罌堂小論」では、敗戦後の日本でまず行われなくてはならないことは新しい政治の確立ではなく、「自我の確立」であるという。「自我の確立」がなければ、再び戦争が繰り返されると安吾は述べる。

何故にかかる愚が幾度も繰り返さるかと云へば、先づ「人間は生活すべし」といふ根本の生活意識、態度が確立さられてをらぬからだ。政党などに走る前に、先づ生活し、自我といふものを見つめ、自分が何を欲し、何を愛し、何を悲しむか、よく見究めることが必要だ。(中略)

日本に必要なのは制度や政治の確立よりも先づ自我の確立だ。

「夜長姫と耳男」において、耳男は夜長姫との関係の中で、天井に蛇を吊しながら好きなものを呪うことで「素晴らしい」仕事のできる「自分自身を発見」していくのである。

その「自分自身」は、作品の後半で耳男が夜長姫を自身の仕事の支えとして途中で一時的に見失われてしまうが、結末における夜長姫刺殺の際に再び取り戻されるのである。耳男は夜長姫を生かしておけば、人間の世界は怖ろしいことになるかと確信し、夜長姫を刺殺することを決意する。そこには、夜長姫という、自身の仕事の支えを失っても生きていこうとする耳男自身の意志が存在していると

考えられる。

また、夜長姫も「夜長の長者の娘」という与えられた地位ではなく、耳男に「サヨナラの挨拶」をしてほしいと願い、耳男の「罌うか殺すか争うか」する対象、つまり耳男の「好きなもの」であることを望む存在となっている。耳男だけでなく、夜長姫もまた、与えられた立場の中で生きるのではなく、耳男との関係の中で「自分自身を発見」しようとする存在として描かれているといえるであろう。

そして、その二人が引かれ合いながらも反発するという展開には、自我の確立された人間同士は対立しあわなくてはならないという安吾の考えが現れている。「自我の確立」とともに、「個の対立」ということも、安吾は繰り返し述べているのである。

ここに個人的対立感情があつて、この感情は文化の低さに由来するどころか、むしろ文化の高さと共に激化せられる如き性質を示してゐる。(中略)文化の高まるにつれて、家庭の姿は明確となり、嫉妬だの対立競争意識といふものは次第にむしろ尖鋭の度を示してゐるのである。

人間と人間、個の対立といふものは永遠に失われるべきものではなく、しかして、人間の真実の生活とは、常にたゞこの個の対立の生活の中に存しておる。

個人の対立というものは、文化の高まりの中で明確化してきたものであり、その対立感情は人間が自我を主張する限り決してなくな

ることではない。そして、対立意識の代表的なものは男女関係において表れると安吾は考えている。「悪妻論」では、自我を持った女は夫と対立し、夫婦は愛し合いながらも、お互いに苦しみあうようになるという。だが、夫婦間の対立は決して失われるべきものではなく、むしろ推奨されるものと安吾は言う。

人間性の省察は、夫婦の関係に於ては、いはゞ鬼の目の如きもので、夫婦はいはゞ、弱点、欠点を知りあひ、むしろ欠点に於て関係や対立を深めるやうなものでもある。(中略) 知性あるところ、夫婦のつながりは、むしろ苦痛が多く、平和は少ないものである。然し、かゝる苦痛こそ、まことの人生なのである。苦痛をさげるべきではなく、むしろ、苦痛のより大いなる、より鋭くより深いものを求める方が正しい。夫婦は愛し合ふと共に憎み合ふのが当然であり、かゝる憎しみを怖れてはならぬ。正しく憎み合ふがよく、鋭く対立するがよい。

人間が人間として生きる限り、夫婦間の対立はむしろ当然であり健全なのである。そして、安吾はこの夫婦の対立に代表されるような、男女関係における愛情と対立という問題について描くことこそ、人生、そして個人の問題を描くことだと考えているのである。

我々小説家が千年一日の如く男女関係に就て筆を弄し、軍人だの道学先生から柔弱男子などと罵られてゐるのも、人生の問題は根本に於て個人に帰し、個人的対立の解決なくして人生の

解決は有り得ないといふ厳たる人生の実相から眼を転ずることが出来ないからに外ならぬ。¹⁰⁾

「夜長姫と耳男」においても、耳男と夜長姫の対立が展開の主軸となっている。耳男は夜長姫に対して、惹かれながらも夜長姫を呪うことで反発しようとしていた。そして結末では、夜長姫を自身の仕事の支えとしながらも、決別するという選択をするのである。そして夜長姫も、人間は「好きなもの」に対して、「呪うか殺すか争う」ことをしなくてはならないという。それは「悪妻論」で、安吾が正しいあり方だと述べている、愛し合いながらも憎しみ合う男女関係と同一のものであると言える。耳男と夜長姫は古代という舞台の中で、自身の自我を発見しようとし、惹かれ合いながらも対立し合うという、安吾の理想とする人間、男女として関わっているのである。

三、「夜長姫と耳男」と当時の世相の関係

それでは、「自我の確立」や「個の対立」という安吾が敗戦当時から繰り返している問題が、なぜ戦後七年経って発表された作品に描かれているのだろうか。

そこには、敗戦後何年たっても日本人の意識は戦前と変わらないところにあるという安吾の問題意識が存在していると考えられる。昭和二十六年十二月に雑誌『新潮』に発表されたエッセイ「風流」には、戦後六年経ても日本人が何も変わらないことについて述べら

れている。この時期に安吾は、日本の各地に足を運んでいたが、被災を受けていない都市が、被災を受けた都市と同じような「窮余の悲風をわざと再現している」¹¹光景に異様なものを感じ、そこには日本人の「ムリヤリ押しつけられた悪条件を甘受し、それになれ親しみ、間に合わせることを人生の本義とみる気風」が現れていると指摘する。そして、「その気風から発した人生の楽しみ方が風流」なのだと言吾は述べる。

更に、戦後から六年を経た日本に戦前と変わらぬ「風流」が根付いてしまうのは、現代の日本人に「ジカの生活」がない、つまり「自我の発見」がなされていないためだと安吾は指摘する。

作者の強制するものになんとかして同化して美を発見したいという作業が日本の風流の鑑賞法であり、自分の気ままに風流を味ったり摂取したりすることは風流にかなうものではないのであった。(中略)

要するに、自分のジカの生活というものがないのである。どうしても主人もちでならなければならないのである。風流の地盤は、強制に服する万全の用意、待望だ。(中略)

だから、風流はいかなる強制にも応じうる。(中略) 強制次第でどこにでも安住できるし、その風流をたのしむ心境にも変わりがない。

強制次第で再び戦争を始めかねないという、敗戦後も変わらぬ日本人の意識に対して、安吾は問題を感じるようになっていく。「夜

長姫と耳男」執筆当時の安吾は、日本がいまだ戦前を彷彿させており、日本人の「自我の確立」が行われていないと考えていたのである。

一方、「自我の確立」のなされていない日本人のいる状況で、政治においても日本は再び戦前の状況へと戻ろうとしていた。「野坂中尉と中西伍長(昭和二十五年三月)の中で安吾は、当時勢力を持ち始めていた日本共産党の姿が、戦時中の軍国主義と同類のものであること、敗戦するとともに力を失ったはずの「カラクリ」である天皇制を、再び利用しようという勢力が台頭していることを指摘している。

再び、集団的な国民発狂が近づいているのである。一方にナホトカから祖国へ敵前上陸する集団発狂者があり、コミンフォルムの批判にシッポを垂れて色を失う集団発狂者がある。(中略)

国民儀礼の代りに赤旗をふってインターナショナルを合唱し、八紘一字の代りにマルクス・レーニン主義を唱えて、論理の代りに、自己批判という言葉や、然り、賛成、反動、という叫び方だけを覚えてきた学者犬が敵前上陸してきた。

天皇は人間を宣言したが、一向に人間になりそうもなく、神格天皇を狂信する群集の熱度も増すばかりである。¹²

鬼頭七美氏は、耳男が夜長姫を怖ろしい存在として絶対視され、村人から「尊い生き神が宿っている」と崇められていく夜長姫の記述から、夜長姫という存在に天皇制という「カラクリ」が象徴され

ているとし、「夜長姫と耳男」には「カリスマ的存在への狂信や集団発狂に対する危機感」が描かれていると指摘している。そしてその「危機感」には、前述のような「天皇信仰の復活・再生産が見据えられている」のだと述べている。

「夜長姫と耳男」は、生き神としての夜長姫に対する村人の呪術的信仰を点描するとともに、主体性を喪失し、スポイルされる耳男の姿を描き出しながら、最後の耳男の夜長姫刺殺に、カリスマ的存在への狂信や集団発狂に対する危機感と、人間の個としての主体性を確保するという「人間の真実の生活」とを、表現した小説なのである。この危機感には、戦争を引き起こし敗戦へと導いた天皇信仰の復活・再生産が見据えられていることとは言うまでもない。¹³

だが、安吾は「墮落論」発表当時に、天皇制に類似した「カラクリ」が再び政治に利用されることは見抜いていた。「そのカラクリを、つくり、そのカラクリをくずし、そして人間はすすむ¹⁴」という繰り返しの中で、人間が少しずつ自我を確立し、個の対立を受け入れて生きていく世界に近づいていくことが重要なのである。安吾が最も問題視しているのは、日本共産党の台頭でも、天皇制の再利用でもなく、昭和二十年の敗戦から何も変わることもなかった日本人の意識にある。

たとえどのような「カラクリ」が発明され、力を持ち始めたとしても、日本人が「自分が何を欲し、何を愛し、何を悲しむか、よく

見究め¹⁵」、自我を発見することで「ジカの生活」を送っていたならば、安吾も危機意識はもたなかったはずである。どんな言論や思想も、「国民がそれを自由に批判し、選り、審判さえできれば、国家が不健全になるはずはない」と安吾は考えていたからである。¹⁶

しかし、日本人は「戦前に復活しうる庶民生活¹⁷」を行い、「強制次第でどこにでも安住できるし、その風流をたのしむ心境にも変わりがない」状態のままであった。このような状態では、「国民がそれを自由に批判し、選り、審判」することを望むことが出来ない。このままでは、再び戦前の「集団発狂」が繰り返されることになってしまう。

だからこそ、安吾は再び「自我の発見」を叫ばなければならなかった。安吾は軍国主義に対して、「国民礼儀と八紘一字が世界を征服するなんて、そんな茶番が実現されては、人間そのものが助からない。私の中の人間が、八紘一字や国民礼儀の蒙昧、狂信、無礼に対して、憤るのは当然であった」という。その時期と類似した政治の状況に対して、安吾が警鐘を鳴らし、当時と変わることのない日本人に「自我の発見」を叫ぶことは、安吾の自我の欲することであり、それを叫ぶことで安吾自身の「人間の生活」もなされるのである。「夜長姫と耳男」執筆時期の安吾にとって、「自我の発見」に関する問題は、再び第一に考えねばならない問題となっていたのである。

四、歴史への視点

では、なぜ前述のような現代の世相に対する安吾の問題意識が、飛驒という古代の日本を舞台にした作品の中で描かれることになったのであろうか。

安吾が歴史小説を執筆するようになったのは昭和十五年、小田原に移り住んだ頃に切支丹関連の書物を読んだことがきっかけである。そしてその当時から、安吾は歴史について語りながら、当時の世相への批判を行っている。昭和十九年二月に『文芸』に発表された「鉄砲」の中で安吾は、信長は鉄砲の能力を真に利用する識見と手腕を持っていたからこそ天下を手中に収めることができたのだとし、信長を「その精神に於て内容に於てまさしく近代の鼻祖であつた」と述べた後、「今我々に必要なのは信長の精神である。飛行機をつくれ。そのみみが勝つ道だ」と太平洋戦争当時の精神主義重視に異を唱えている。¹⁸⁾

長山靖生氏は、安吾の歴史小説には「現代と過去とを二重写しにする手法」が見られるとして次のように述べている。

安吾の歴史小説には、現代と過去とを二重写しにする手法が見られるが、それは彼が歴史小説に本格的に取るくむ以前からの「歴史」そのものへの姿勢だった。(中略)

歴史に材を取ることによって、より明確に現代という時代への批判精神を発揮させたということである。¹⁹⁾

このような「現代と過去とを二重写しにする」手法の背景には、歴史を現代との繋がりで見えようとする安吾の意思が存在している。昭和二十六年七月九日発行の『読売新聞』に掲載された読者アンケートの回答の中で、安吾がどのような時代の歴史小説を書きたいかということに次のように言及している。

どの時代も興味深いのが、今が戦争のあとで同時に戦争の前夜のようなこともあるから、今に通じている時代に特にひかれるが、実は案外にも、日本の歴史は神話以来一貫して、乱世にまた現代に通じているようです。(中略)概して神話や上代は現代のマーケット興亡史に類似していますね。²¹⁾

安吾は日本の歴史の中でも「今に通じている時代」に関心をよせており、更に昭和二十六年当時の世相から「日本の歴史は神話以来一貫して、乱世にまた現代に通じている」と考えていた。安吾は歴史を見るとき、現代の世相という視点から共通性、連続性を視点としていたのである。

そして、そのような歴史への視点は昭和二十六年に『文藝春秋』に掲載された「安吾の新日本地理」を経て「夜長姫と耳男」以降の歴史小説へと受け継がれていくことになる。この連載の中で、安吾は日本の各地を巡り、その土地の風土の特色や歴史、古代史への考察を行っていくのだが、その第一回を伊勢神宮から始めている。このことについて、田邊裕史氏は「過去のゆがめられた日本の歴史に

挑戦する安吾歴史の序章をなすものとの意識で取り掛かった²¹からこそ、「過去のゆがめられた歴史」の中心にある天皇崇拜の象徴であった伊勢神宮から連載を始めたのだと述べているが、それと同時に、当時の世相に再び天皇制を利用しようという勢力の台頭を安吾が認識しており、その世相との繋がりから歴史を見ようとする安吾の意思があったと考えられる。だからこそ、安吾は連載第一回の冒頭で「一方にマルクスレーニン筋金入りの集団発狂あれば、一方に皇居前で拍手をうつ集団発狂あり、左右から集団発狂にはさまれては、もはや日本は助からないという感じであった²²」という当時の世相への言及を行っているのである。

しかし、安吾は現代の世相との関連という視点から歴史に関心を持ち、捉える一方で、作中の登場人物を固定化された存在として動かそうとはしない。その理由は「教祖の文学」の中で、小林秀雄の反発として現れている。

生きてる奴は何をやりだすか分らんと仰有る。まつたく分らないのだ。現在かうだから次にはかうやるだらうといふ必然の筋道は生きた人間にはない。死んだ人間だつて生きてる時はさうだつたのだ。人間に必然がない如く、歴史の必然などいふものは、どこにもない。人間と歴史は同じものだ。たゞ歴史はすでに終つてをり、歴史の中の人間はもはや何事を行ふこともできないだけで、然し彼らがあらゆる可能性と偶然の中を縫つてゐたのは、彼らが人間であつた限り、まちがひはない。(中略) 死人の行跡が退ツ引きならぬギリギリなら、生きた人間にして

かすことも退ツ引きならぬギリギリなのだ。²³

歴史を固定化されたもの、必然の中に置いて観察するのは間違つていると安吾はいう。生きている人間は「自分でも何をしてかすか分らない」存在であるが、歴史上の人物もまた、かつて生きていた以上「何をしてかすか分らない」存在であつたのである。

そして安吾は、「何をやりだすか分らん」人間が生き、生活しているということの中にその存在にとつての現代があると考えている。昭和二十三年一月に雑誌『新小説』に発表された「現代とは？」の中で、安吾は現代というものは生きている人間が現実に生活を行う、その中に存在しているのだと述べている。

現代は歴史ではなく、生活それ自体だからだ。生活自身は歴史的に観察整理され得ざるところに本領があり、どこの地獄へ流れつくのか見当のつかない曠野の遍歴と自らの何者たるかを知らないバカ者、つまり生活しつ、ある人間一匹がいるのみなのである。(中略) 歴史的な観察法は現代には通用しないものだ。なぜなら、人間と一口に言うが、いわゆる人間一般と、自分という五十年しか生きられない人間とは違う。人間は永遠に在るが、自分は今だけしかない。そこに現代というもの、特性があり、生活というものが歴史的な観方と別に現実だけのイノチによつて支えられているヌキサシならぬ切実性があるのである。²⁴

「現実の生活」とは、安吾が繰り返し述べている自分自身の自我

を発見することで行われる「真実の生活」のことを指している。安吾自身を含め、自分自身が生活する「今」という時間こそが、現代そのものであると安吾は述べていたのである。安吾の歴史小説は、歴史の中に存在する人物を「生活しつ、ある人間一匹」として捉え、歴史の中の自分物の行為を「現実だけのイノチによって支えられているヌキサシならぬ切実性」によって行われたものとして考察しようとしている。つまり、現代を見ることと同じ視点で歴史上の人物や出来事をみようとするのである。

それは、「夜長姫と耳男」における耳男にも表れている。第一節で述べたように、安吾は飛驒への取材の中で飛驒の匠という存在とその仕事に興味を持った。それは飛驒の匠が集団の中にあつて、作者の名を残すことを考えない無名の存在だったからである。だが、「夜長姫と耳男」における耳男は、「名を残す」ことを考えず、「その出来栄えに自ら満足することが生きがかった」という飛驒の匠としてではなく、先に論じたように、自我を発見し、主張しようとして悪戦苦闘する存在として描かれていた。それは耳男を飛驒の匠という歴史の中の存在としてではなく、「自分でも何をしでかすか分らない」存在、生きていく人間と同じ視点で捉えることである。

このような、歴史の中の存在を生きている人間として描くことこそ、安吾の歴史小説の目的であった。「教祖の文学」の中で安吾は、歴史小説というのは歴史学と違い、歴史の中に固定化された人間を、「自分でも何をしでかすか分らない」人間の一人として捉えることに意味があるのだと述べている。

生きてる人間といふものは、（実は死んだ人間でも、だから、つまり）人間といふものは、自分でも何をしでかすか分らない、自分とは何物だか、それもてんで知りやしない、（中略）せつばつまれば全く何をやらかすか、自分ながらたよりない。疑りもする、信じもする、信じようとし思ひこまうとし、体当り、遁走、まつたく悪戦苦闘である。こんなにして、なぜ生きるんだ。文学とか哲学とか宗教とか、諸々の思想といふものがそこから生れて育つてきたのだ。

長山氏は、安吾の歴史小説の目的を「安吾の志向は、史料を超えて人間乃至は人間性に肉薄することにあつた」と指摘している²⁶。それはつまり、過去に存在した人間を、現代に生きている、安吾自身を含めた人間と同じ存在として描こうとすることである。この意識は安吾の中で年々強まり、昭和三〇年の一月から『中央公論』にて連載されたルポエッセイ「安吾新日本風土記」の連載第一回「高千穂に雨ふれり」の中で、安吾は「人間が為すであろうこと、行うであろうことの考察から歴史を考えてみることも、一つの試みとして有ってもよからうと思うのである」と述べている²⁶。安吾は歴史とその中での人物を固定化されたものではなく、現在生きている人間と同様の「生活しつ、ある人間」として捉え、その行動へ至る心理の過程を考察することで、その中に存在する「歴史のカラクリ」へと迫ろうとしていたのではないだろうか。安吾は「現代も亦歴史の一つ」と考えていることから、その「カラクリ」を明らかにすること²⁶は、現代の世相の中に存在し、再び戦前へと戻らうとする「カラクリ

り」を明らかにすることと同義であったと考えられる。

おわりに

安吾の小説執筆の再出発点となった「夜長姫と耳男」は、安吾が繰り返し主張していた「自我の発見」と「個の対立」を行う男女の姿を中心に展開していた。それは、いまだ日本人に「自分自身の発見」がなされておらず、敗戦当時から何も変わっていないという当時の安吾の問題意識の反映であった。その舞台が古代の飛騨に設定されていた背景には、当時の安吾が歴史の中の人間を固定化された存在としてではなく、「自分でも何をしでかすか分らない」「生活しつゝある人間」として捉えることで、日本の歴史、そして現代社会の中に存在している「カラクリ」を明らかにしようとする安吾の試みが存在していると考えられる。このように、「夜長姫と耳男」には、晩年期に至り、更に深まりを見せることになる安吾の関心や問題意識が反映されていたのである。

そして、「夜長姫と耳男」発表以降、安吾は多くの小説を発表する中で、さらに人間や歴史への考察を深めていくことになる。安吾の試みは昭和三十年二月の自身の死去によって終止符を打つことになるが、その間の安吾の人間や歴史への考察が、世相との関わりの中でどのように変化、発展していき、何を目指していたのかを明らかにすることを今後の課題としたい。

【注】

(1) 七北数人は『評伝 坂口安吾 魂の事件簿』(集英社 二〇〇二年六月)の中でその時期の安吾について次のように述べている。

しかし、この長編を書き終えた五〇年十月以降、五十二年六月の「夜長姫と耳男」まで、安吾は小説から遠ざかってしまう。エッセイ以外では「安吾捕物」と「安吾史譚」(エッセイと小説の混交)、他に軽いユーモア小説が数篇あるだけで、やはり「なるべく疲れずに」できる仕事を中心となった。

(2) 神田重幸「坂口安吾——作家研究案内 夜長姫と耳男」(『国文学解釈と鑑賞別冊 無頼派を読む』〈至文堂 一九九八年一月〉所収)

(3) 『坂口安吾全集12』(筑摩書房 一九九九年一月)所収。

(4) 本丈映子「オレ」が「オレ」であるために——坂口安吾「夜長姫と耳男」論 (前編) (『論樹』一三号 一九九九年三月)

(5) 『坂口安吾全集04』(筑摩書房 一九九八年五月)所収。

(6) 注(5)に同じ。

(7) 注(5)に同じ。

(8) 注(5)に同じ。

(9) 『坂口安吾全集05』(筑摩書房 一九九八年六月)所収。

(10) 注(5)に同じ。

(11) 注(3)に同じ。

(12) 『坂口安吾全集08』(筑摩書房 一九九八年九月)所収。

- (13) 鬼頭七美「生き神信仰を越えて——「夜長姫と耳男」論——」
 『昭和文学研究』四四号 二〇〇二年三月
- (14) 注(5)に同じ。
- (15) 注(5)に同じ。
- (16) 注(12)に同じ。
- (17) 注(3)に同じ。
- (18) 『坂口安吾全集03』(筑摩書房 一九九九年三月)
- (19) 長山靖生「歴史」『坂口安吾事典〔事項編〕』(至文堂 二〇〇一年十二月) 所収
- (20) 注(3)に同じ。
- (21) 田邊裕史氏「安吾・伊勢神宮にゆく」(『坂口安吾事典〔作品編〕』(至文堂 二〇〇一年九月) 所収)
- (22) 『坂口安吾全集11』(筑摩書房 一九九八年十二月)
- (23) 注(9)に同じ。
- (24) 『坂口安吾全集06』(筑摩書房 一九九八年七月)
- (25) 注(21)に同じ。
- (26) 『坂口安吾全集15』(筑摩書房 一九九九年十月)
- (27) 注(5)に同じ。
- (28) 注(18)に同じ。

※「夜長姫と耳男」本文は『坂口安吾全集12』(筑摩書房 一九九九年一月)から引用した。